



TITLE:

<学界展望> 学史・方法論

AUTHOR(S):

柴田, 陽一

CITATION:

柴田, 陽一. <学界展望> 学史・方法論. 人文地理 2013, 65(3): 217-220

ISSUE DATE:

2013-06-28

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/179322>

RIGHT:

© 人文地理学会

ものとしては、アレクサンダー・フォン・フンボルトに関する研究が幾つか発表された。木村直司編訳『フンボルト 自然の諸相』（筑摩書房）は、フンボルトの *Ansichten der Natur*（1808年第1巻初版）の翻訳である。ゲーテの研究・翻訳に長年携わってきた編訳者のまえがき・解説によると、同書はフンボルトの「最もポピュラーな科学的エッセイ集と生前から認められている」ものであり、「熱帯自然の絵画的記述」という副題が示すように、彼の自然に対する美的な見方を述べたものである。美学思想を専門とする長野順子は、「アレクサンダー・フォン・フンボルトの自然絵画」（『日常性の環境美学』勁草書房）と「〈絵のような〉自然から〈自然絵画〉へ」（美学芸術学論集8）において、フンボルトの自然記述における科学と芸術の分裂または融合という問題に対する関心の下、自然の相貌を視覚的イメージのみでなく、全感覚的に捉えようとした彼の「自然絵画」という独自の試みについて検討を加えている。フンボルトに大きな影響を与えたゲオルク・フォルスターの旅行記（1791-92年初版）が、船越克己訳『ニーダーラインの光景』（大阪公立大学共同出版会）として出版されたことも注目される。1790年に若きフンボルトと共に行った西ヨーロッパ旅行について記した同書から、フンボルトの思想形成の一端を知ることができよう。この旅行記の長い原題に含まれる *Ansichten* の語は、フンボルトの上記書名に踏襲されている。

フンボルト以前の地理学については、大嶽幸彦「18世紀における世界地理叙述に見られる探検家と地理学者（その2）」（帝京大学文学部教育学科紀要37）が得られた。同論文は、1975年のヌマ・ブロックの国家博士論文『啓蒙思想家たちの地理学』（2008年に大嶽訳）の第2部「世界への新しいまなざし（1765-18世紀末）」と結論部分の紹介である。啓蒙時代の「地理学」は、啓蒙思想家たちにとっての「道具や武器」であり、「新しい倫理界の到来と同じく自然界の拡大の仕事をしていた」というブロックの結論は、近代地理学成立以前の「地理学」の社会的地位を我々に教えてくれる。

19世紀の世界の地理学に関する研究について見てみよう。吉田雄介「イランに関する地理的知識の拡大と英領インドの役割」（『アジアにおける文化システムの展開と交流』関西大学出版部）は、1850年代から1870年代にかけての英王立地理学協会雑誌に掲載されたイ

■ 学史・方法論

柴田陽一

地理学史の研究については、世界、日本を対象とするものを順に整理する。まず、世界の地理学に関する

ランに関する論文の執筆者・形式・内容を分析している。1830年代から1840年代を分析した「王立地理学協会とイラン」(関西大学東西学術研究所紀要43, 2010年)の続編である。旅行日誌という形式は「コンテキストに左右されない客観的・科学的論文形式」であり、英領インドとイランの関係が密になるにつれて、この形式の論文が増加したと、吉田は論じている。同じく地理学協会に関するものとして、高田和夫『ロシア帝国論』(平凡社)がある。科学の国家化・国民化の諸相を論じた章の中で、高田は1845年に設立されたロシア地理学協会に注目し、同協会が参謀本部や総督府と協力して帝国内外の諸地域の調査研究に従事し、「帝国経営の先兵」としての役割を果たしたことを明らかにしている。『中国奥地紀行』(平凡社, 2002年), 『イザベラ・バード極東の旅』(平凡社, 2005年)と同様に詳細な訳注が付されたイザベラ・バード(金坂清則訳注)『完訳日本奥地紀行』(平凡社, 全4巻のうち第1-3巻)は、*Unbeaten Tracks in Japan* (1880年)の完訳である。バードにとって不本意な削除作業を施した1885年の簡略本およびそれに基づく邦訳書(平凡社, 1970年)とは異なり、付録・地図・挿絵・索引いずれも一切省略しない完訳本は、旅の記録と覚書を調和させた首尾一貫した「日本研究書」とも言うべき、原著の魅力を再現することに成功している。特に第3巻の北海道のアイヌ世界に関するバードの記述は興味深い。訳者解題によると、この部分に寄せられた批判が簡略本出版の契機の一つとなったようである。鈴木楠緒子『ドイツ帝国の成立と東アジア』(ミネルヴァ書房)は、バードと同様19世紀の日本を描いたオイレンブルク使節団による旅行記の執筆者、叙述スタイル、読者の反応を分析した章を含む。

20世紀の世界の地理学に関する研究としては、田畑久夫「ウィットフォーゲルの地理認識(下)」(昭和女子大学文化史研究15)が得られた。昨年(「同(上)」(同誌14))に続き、『地理学批判』(1933年)の第1編「地理政治学の本質とその批判」の検討を通じて、マルクス主義地理学者としてカール・ウィットフォーゲルを再評価しようと試みている。ソ連時代の地理学者と自然改造計画との関わりについては、地田徹朗「社会主義体制下での開発政策とその理念」(『激動の近現代(中央ユーラシア環境史3)』臨川書店)が、科学アカデミー地理学研究所長を務めたインノケンチ・ゲ

ラシモフを中心として明らかにした。梶田真「農村地理学の誕生・発展とUCL地理学教室」(東京大学人文地理学研究20)は、1960年代以降のイギリスにおける農村地理学の成立と展開を、ロンドン大学ユニバーシティ・カレッジ地理学教室に所属した3人の地理学者に焦点を当てて跡付けた。梶田真による「1980年代以降のイギリス医学・健康地理学における政策志向的研究の展開」(人文地理64-2)と「イギリス地理学における政策論的(再)転回をめぐる議論」(地理学評論85-4)は、1980年代以降のイギリス地理学における政策志向的な研究をめぐる議論についてまとめたものである。「地域的な文脈や差異に注意した「慎重な」政策評価や政策・制度デザイン」に地理学が「政策形成に貢献するための可能性」があるという梶田の提言は、東日本大震災以降ますます社会的貢献を主張するようになった日本の地理学界に示唆を与えるものである。

次に、日本の地理学に関するものを整理していこう。近世日本の地理学については、松浦茂「高橋景保『北夷考証』の成立と北方地理学の進展」(アジア史学論集5)が発表された。東北アジア史を専門とする松浦は、樺太とサハリンが同じ島であること証明した1806年の『北夷考証』が、いかなるコンテキストの中で成立したのかを明らかにした。岡田俊裕「江戸期地理学者の研学行動」(日本古書通信989, 2011年)は、研学行動の共通性に注目して江戸時代の地理学者の特徴を論じた。同論文は、『日本地理学人物事典 近世編』(原書房, 2011年)の補足解説の役割を担っている。岡田によれば、松浦の取り上げた高橋は、「おもに蘭学・洋学の研鑽および素養によって外国地理・世界地理を知ろうとした」地理学者に分類されるという。岡田の「地理学(者)」に対する見方は、昨年の本欄で現在主義的なものであると批評されたが、同事典の書評(地学雑誌121-3)にもこの点に関する言及がある。

続いて近代日本の地理学に関する研究について見てみよう。明治期に関するものとしては、島津俊之「地理学者としての高島北海」(空間・社会・地理思想15)が得られた。著名な日本画家である高島北海は、本名の得三時代に工部省や内務省の地質・植物帯調査で培った地理学的想像力を、画業に専念後も保持し、「地理学者」という自己認識も変わらず抱懐していたと述べている。高島のテキスト群の包括的な検討をもとに、

同時代主義的な視点からも彼は「地理学者」と捉えられると島津は主張している。高島と同じく明治期の「官庁地理学者」を取り上げたものとして、塚本学『塚本明毅』（ミネルヴァ書房）がある。塚本明毅は太政官正院や内務省地理局の地誌課長として地誌編纂事業に携わった人物であり、同書は彼についての本格的な評伝である。源昌久「陸軍士官学校における科目「兵要地学」に関する一研究」（淑徳大学研究紀要46）は、明治期の陸軍士官学校の条例・教育綱領・教則を調査し、「兵要地学（地理）」のカリキュラム上の位置づけを明らかにすると共に、2種類の教程（教科書）の内容を紹介している。牧口常三郎の『人生地理学』（1903年初版）については、同書の4種類の中国語版（1903-1909年）を翻訳編集者による追加部分に注目して比較することを通じて、留日中国人学生の愛国意識の形成要因を検討した高橋強「清末留日中国人学生と愛国意識の高揚」（創大中国論集15）と、『牧口常三郎全集』1-2巻（第三文明社、1983・1996年）に当てられた同書の補注の未公開部分である斎藤正二「『人生地理学』補注」補遺（第1回）」（創価教育5）が発表された。

大正・昭和期については、川合一郎「今西伊之吉と奈良の歴史地理」（歴史地理学54-2）が、歴史地理学の草創期において中央・地方間に双方向の交流があったことを、今西と喜田貞吉を例に論じている。その結論は、柳田民俗学に見られる中央の「考える人」と地方の「集める人」という構造に対する部分的な異議申し立てとなっている。川合も指摘するように、今西の研究の多くは現代から見れば「歴史地理とはみなせない」ものであるが、同時代においては彼の研究も歴史地理学という「知」であったことを理解する必要がある。「地学者列伝」の1編である石山洋「篤学の士東木龍七の貝塚の配置による地形変化の解明から独自の地誌学提唱まで」（地球科学66-4）は、東京帝国大学地理学科助手を務めた東木の関東平野の地形学的研究や、微地形学を基礎とする地誌学について紹介している。鈴木厚志ほか「立正大学熊谷図書館特別展「古地図・絵図 田中啓爾コレクションの世界」の記録」（地球環境研究14）で紹介された田中のフィールドノート・スケッチ帳・日記は、彼の地理学研究の再検討を行う際に有用な資料となり得よう。藤田佳久『日中に懸ける』（中日新聞社）は、もと新聞紙上に連載さ

れたものであり、東亜同文書院に関する藤田のこれまでの研究成果が分かりやすくまとめ直されている。

以上、世界と日本の地理学史に関する個々の研究成果について見てきたが、この分野における今年最大の成果は、2013年の京都国際地理学会議に向けて、『地学雑誌』121巻4～5号で「世界の地理学」と題する特集が組まれたことであろう。取り上げられた国・地域は、イギリス（矢野桂司）、ドイツ（森川洋ほか）、フランス（手塚章）、スイス（大村纂）、オーストリア（呉羽正昭）、スペイン（竹中克行）、ポルトガル（池俊介）、スウェーデン（山下潤）、フィンランド（湯田ミノリ）、ロシア（小俣利男）、ポーランド（山本茂）、スロヴァキア（小林浩二ほか）、ルーマニア（漆原和子）、オランダ（伊藤貴啓）、アメリカ（矢ヶ崎典隆）、カナダ（山下宗利）、ブラジル（丸山浩明）、韓国（金科哲）、中国（小野寺淳）、台湾（葉倩璋）、ベトナム（春山成子）、インドネシア（瀬川真平）、インド（岡橋秀典ほか）、オーストラリア（堤純）、ニュージーランド（菊地俊夫）、アフリカ（大山修一・桐越仁美）の計25に上る。これらの国・地域における地理学の歴史、現在の研究動向、社会的地位などを日本語で（英語では多数の類書がある）容易に知りうるようになったという意味で、本特集は正に画期的と言ってもよい。紙幅の関係上、各論文の内容には立ち入れないが、本特集と上述した個々の研究を併せ見たとき、我々は様々な空間と時期における「地理学（者）」なるものの差異について否応なしに気づかされる。「国によって地理学の役割とイメージに驚くべき差異が存在するので、このような差異がいかんにして、また何故生じてきたのか」という点に関して…考えて見る必要がある」とは、25年前のデービッド・フーソンの言葉（『地理学思想の比較論的展望』（筑波大学人文地理学研究11、1987年））だが、今は亡き彼や竹内啓一が目指した世界の地理学の比較社会史・思想史的研究は、今後も地理学史の重要な課題となろう。

地理学方法論や研究動向の研究として最も注目されるのは、上述の『地学雑誌』と同様に京都国際地理学会議に向けて、『人文地理』64巻6号がProgress of Human Geography in Japan since 1980 Part Iとして刊行されたことであろう。東京で国際地理学会議が開催された1980年以降の日本における、地理思想史と社会・文化地理学（島津俊之ほか）、都市地理学（香

川貴志ほか), 地理教育 (戸井田克己ほか), 政治地理学 (山崎孝史ほか) に関する研究動向が英文でまとめられている。都市地理学以下は各項目で取り上げられるであろうから, ここでは地理思想史と社会・文化地理学に関する Shimazu Toshiyuki *et al.*, 'Imported scholarship or indigenous development?' (人文地理 64-6) を見ておこう。国際地理学会議後に組織された地理思想史科研グループや, 地理思想史や空間と社会, 批判地理学などに関する日本地理学会と人文地理学会の下部組織 (研究グループや研究部会) が, 近30年の日本における地理思想史や社会・文化地理学の相互作用的な発展を促す「インキュベーター」としての役割を果たしたと, 島津らは論じている。近代地理学の批判的考察や, 非アカデミック地理学への注目 (地理学史から地理思想史への展開), 人文主義的アプローチ, 文化論的・空間的転回といった英語圏人文地理学の魅力的な方法論や研究動向の多くが, これらのグループや組織を通じて「輸入」されたことを再度確認しておきたい。ただ, 「輸入」ということに関しては, 二村太郎ほか「日本の地理学は『銃・病原菌・鉄』をいかに語るのか」(*E-journal GEO7-2*) が, 内容に問題のあるアメリカの地理学者ジャレド・ダイヤモンドのベストセラーが日本で広く受容されることを地理学者が放置したことを例に, 我々が「輸入」に際してもっと批判的な視点を持つべきことを説いている。「教養書として非常に大きな成功を収めた作品について, ここまで議論をせざるにきてしまったことは, 地理学にとどまらず, 学術界全体の責任放棄を問われかねない事態ではないか」という彼らの言葉は重く受け止めねばなるまい。

地理思想史科研グループ発行の『空間・社会・地理思想』には, 文化論的転回以降忘れがちになっている「文化」という語が歴史的に持つイデオロギー的・政治的側面を確認させてくれるエミリー・A. ヴォグト (成瀬厚訳) 「文明と文化」(空間・社会・地理思想15) や, 最近注目されている物質や他者を通した「ホーム」の感情の喚起に関するマイク・クラング, ディヴィア・トーリア=ケリー (森正人訳) 「国民, 人種, そして情動」(空間・社会・地理思想15) などが掲載された。また, 福田珠己による書評「Rose, G. 著: *Doing Family Photography*」も, クラングらの論文と同じく, 英語圏における物質性や情動, 「ホーム」

の議論と関わる内容のものである。

他にもフィールドワーク・風景論・景観論・観光空間・経済地理学・フェミニスト地理学などの最新の方法論や研究動向に関する論文が多数あるのだが, もはや紙数が尽きた。各項目で取り上げられることを願いたい。